

こんにちは、ヘルパーステーション カルムです。

前回の「認知症について④」の続きになります。

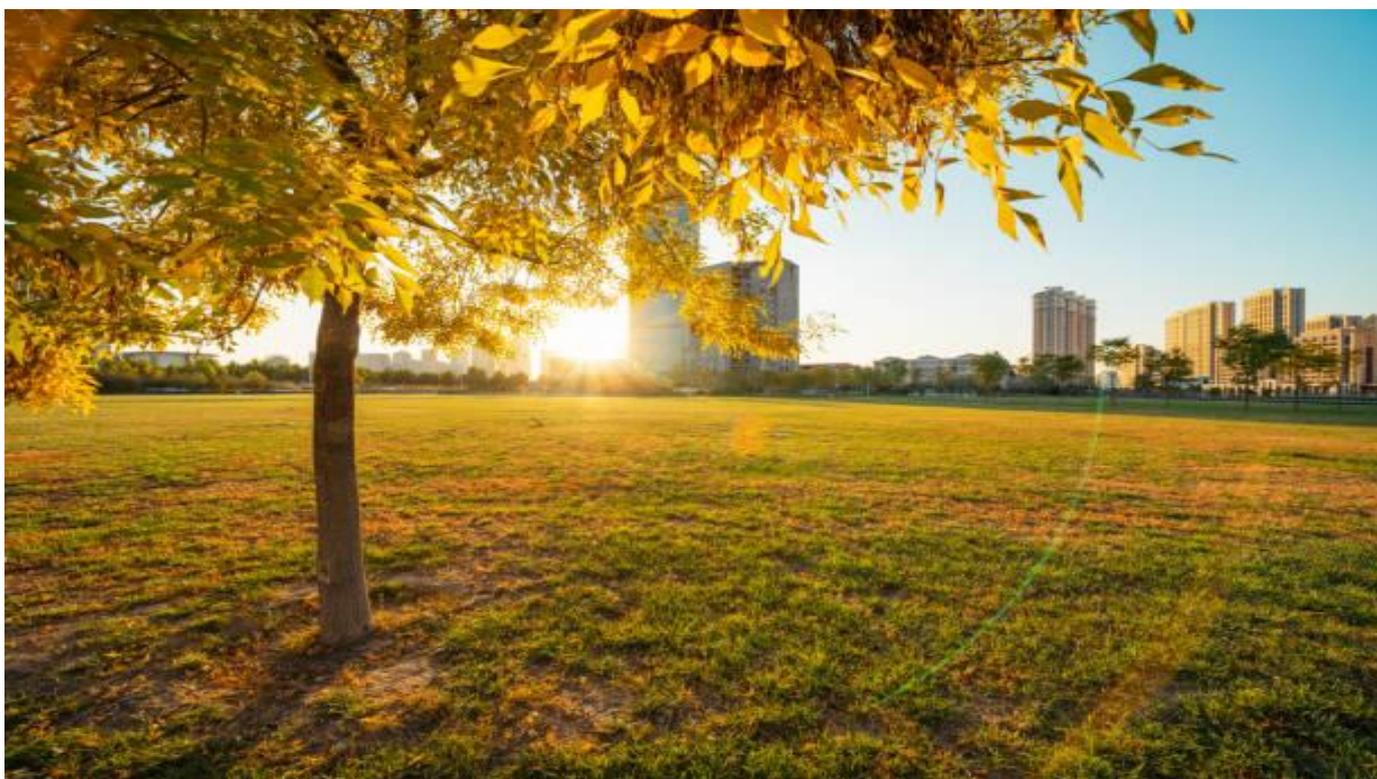
❖ 認知症ケアの目的を一言で表すならば QOL の向上。

❖ QOL を高めるためにはその人自身を知ることから始まる。

ということが前回の要点でした。

今回のキーワードは

生活の中で行う認知症の方の一人ひとりに合った活動の重要性



生活の中で行う認知症の方の一人ひとりに合った活動の重要性

活動＝アクティビティは単に遊びや楽しみ、趣味活動として捉えられることが多いですが、アクティビティの領域はもっと広く、家事や仕事といったことを含み、日常生活全般における「日々の生活活動」の全て、生活行為の工程そのものが対象となります。

認知症になっても残りやすい記憶として、手指の動きや動作を伴うものとして体で覚えているものが多い。

ただし、認知症になると中核症状の影響などから、今までできていたことができなくなってしまうこともあり、アクティビティに関しても同様に IADL 低下という課題が付きまとうことになります。

手指の動きは動作を伴うものが必要となる。ADL や IADL に支障をきたし、特に IADL は初期の頃から低下し始める。



アセスメントしながら何が必要かを導き出す事が大切

- ① アクティビティ選択の動機
 - ② 使い方
 - ③ 関わり方
- ①～③をもって意味のあるアクティビティとなることを考える。

適切なケアとして全て可視化でき納得して活動に移られるよう配慮が必要で、活動することが目的にならないようにしなければなりません。

認知症の方も私達も同じく QOL 向上を目指して生活しています。BPSD が軽減されたところが終着点ではなく「ゼロベース」として捉え、そこから本来の QOL の目的地に向かうようサポートしていくことが望ましいケアに繋がります。

次回のキーワードは

PDCA サイクルの理解です。ありがとうございました。